

特集 『道徳科学の論文』を現代によみがえらせる試み

モラロジーとケアの倫理

—正義、慈悲、ケア—

竹内 啓二

目次

はじめに

1. モラロジーにおける正義と慈悲
2. ケアの倫理の特色
3. まとめ

はじめに

発達心理学者のギリガンの著書『もうひとつの声 心理学理論と女性の発達』（1982年）で、ギリガンは、コールバーグに代表されるそれまでの発達モデルは男性の発達過程に適合するのみで、女性には男性と異なる発達過程があると主張した。そして、前者を正義の倫理、後者をケアの倫理と名づけた。その後、ケアの倫理の評価をめぐる、ケア対正義論争と呼ばれる激しい論争が展開された¹⁾。

ケアの倫理が指摘しているように、社会契約論、義務倫理学、功利主義といった、近代の倫理学において正統派と呼んでよい諸理論は正義によって基礎づけられている。現代の正義の観念は、人間は平等に尊重される権利をもっていることを最も根底の基盤としている²⁾。

したがって、個人と個人とはたがいに対等な関係にあり、公平にあつかわれなくてはならない。それゆえ、道徳的な原理は、個々人に等しく適用され、普遍妥当性を充たしているものでなくてはならない。そうした普遍妥当的なルールに到達するためには、個々人の個別の状況は捨象して、個々人の主張に対して公正で中立的な推論の手続きを経なくてはならない。この一連の推論のなかから鍵となる概念を拾えば、権利、平等、公平、普遍化可能性、公正、中立性、抽象性、推論、手続き的等々がそれにあたる。これらの鍵概念が相互にからみあって、現代の正義論はできあがってい

1) 品川哲彦『正義と境を接するもの—責任という原理とケアの倫理』ナカニシヤ出版、2007年、p. 4, p. 6.

2) 品川、p. 4

る³⁾。

『道徳科学の論文』は、1928年（昭和3年）に初版が、1934年（昭和9年）に第二版が出版されている。当時においても支配的であった正義によって基礎づけられている倫理学の正統派から影響を受けていて当然である。まず、モラロジーにおいて正義と慈悲についてどのように述べられているかを確認し、ケアの倫理の特色を概観し、ケアの倫理と対比した場合、どのようなモラロジーの特色が明らかになるかを見て行きたい⁴⁾。

1. モラロジーにおける正義と慈悲

最高道徳において正義と慈悲はどのように捉えられているのかを、『道徳科学の論文』の記述から見て行きたい。『新版『道徳科学の論文を学ぶ』』（モラロジー研究所編、平成15年）を手がかりに、要点を押さえながら、『論文』の正義と慈悲に関する記述を整理する。

(1) 最高道徳における正義と慈悲

最高道徳の基礎的観念は正義と慈悲であり、神の本質も正義と慈悲である。そして、最高道徳の実行とは正義と慈悲を実現することである。では、その正義とは何かというと、自然法であり、その本質は神の心である。自然法とは、宇宙の本体（神）の働きに関する法則であり、その本質は正義である。要するに、正義＝神の心＝自然法というふう捉えてもよいであろう。そして、正直、誠も自然法と同一であるという。中国の『中庸』に述べられているように、自然法は、正義・中庸でもあり、平均・衡平・公平を要求する。

自然法に関する西洋の学者の解釈では、グロティウスによれば、自然法とは理性の格率であり、神も従うべき自然的秩序、道徳的秩序、普遍的秩序である。ソクラテス学派によると、制定された法律の基礎には自然法があり、制定法は自然法に則るべきである。西洋では、この自然法が理想法として存在し、制定法を進化させることになったが、インドも中国も、自然法という考え方がなく、西洋のような進化がなかった。

- 1. 最高道徳の基礎的観念の第一は正義と慈悲にある。（『道徳科学の論文』⑦50）
- 2. 諸聖人によれば、神の本質は正義と慈悲である。（⑦50）
- 3. 最高道徳の実行は正義と慈悲の実現である。（⑦51）

3) 品川、p. 17

4) 上野千鶴子は、本稿で取り上げるようなケアの倫理の理論をケアの規範理論として、批判的に検討している。上野は、ケアへの哲学的・倫理的アプローチには、以下のような共通点があると述べている。(1) ケアをそれ自体で「よきもの」とする規範性。(2) ケアを扱う際の抽象性と過度の一般化。したがって、どのような行為が実践的・具体的にケアにあたるかについての言及がきわめて少ない。(3) 本質主義、すなわち脱文脈性や文脈超越性。どんな文脈でも妥当するような普遍理論への志向。(4) 脱ジェンダー性。上野の関心は、(1) 記述的(経験的)アプローチ、(2) 規範的アプローチの再文脈化であるとする。また、ケアとは文脈しだいで、愛の行為から抑圧、搾取、強制労働まで、さまざまなすがたをとりうる個人と個人のあいだの相互行為であるとも指摘している（上野千鶴子『ケアの社会学—当事者主権の福祉社会へ』太田出版、2011年、pp. 45-46）。上野の『ケアの社会学』には注目すべき批判や議論が展開されている。本書では、高齢者介護に限定してケアを論じているが、家族介護を問題化し、「家族の失敗」を「市場の失敗」と並んで強調している。（上野、p. 132）

- 4. 正義はいわゆる「自然法」であり、その本質は神の心である。(⑦51)
- 5. 自然法とは、宇宙の本体（神）の作用に関する法則であり、その本質は正義である。(⑦51-53)
- 6. 例えば、日本では古来「神は正直の頭に宿る」といわれている。また、明治天皇は御製に「目に見えぬ神の心にかよふこそ人の心の誠なりけれ」とあるように、人の心の誠も、正直と同じことである。(⑦51-52)
- 7. 中国でも、『中庸』には、「誠は天の道なり。これを誠にするは人の道なり」といい、自然法と誠とは同一であるとしている。また、
- 8. 中国の聖人の教えでは、自然法は神の心の表現であり、その本質は正義・中庸であって、万物の成育および人間幸福の本である。また、神（本体）の作用である天道は、中庸・正義であるから、すべてに平均・衡平・公平を要求する。(⑦52-53)
- 9. 自然法に関する西洋の学者の解釈
 - ・グロティウスによれば、自然法は真の理性の格率である。神も自然的秩序、道徳的秩序である普遍的秩序に従うものであった。
 - ・ソクラテスの学徒は「法律の基礎は何か」「各国民・各政府・各時代に共通の大法は何か」という問いに、自然であると答え、個々の制定法はこの自然に則るべきものとした。人の社会的・政治的・法律的生活において、この自然法による合法行為を正義と称し、この正義の観念の体现をもって立法・司法その他すべての法律の理想とした。(⑦56)
 - ・ギリシア哲学における自然法と制定法との対立は、その後、西洋世界における法律進化の原動力となった。(⑦56)
 - ・インドの法律は神授法であって、現実の法律が最高の理想法であるから、現実の法律に超越して、その進歩改善を導くものがなかった。中国では、儒家の徳化礼治と法家の法治の対立、乖離によって、現実法の上に超越して存在する理想法がなかった。(⑦59-60)

(2) 宇宙的正義と人間的正義もしくは社会的正義

自然法の本質である正義は宇宙的正義であり、人間社会の正義を人間的正義もしくは社会的正義という。後者は、人により国により異なる。宇宙的正義を理解するためには、聖人の教説を見なければならぬ。

- 1. 自然法の本質である正義を宇宙的正義 (universal justice) と称し、人間社会の正義を人間的正義 (human justice) もしくは社会的正義 (social justice) と称する。(⑦69)
- 2. 人間的正義・社会的正義は人間社会の正義であり、その標準は人によって、国によって異なる。それゆえ、何が真の正義かは確定していない。
- 3. 宇宙的正義は人間的正義よりはるかに偉大であって、人間的正義から推察するだけでは確定できないから、聖人の教説を考察する必要がある。(⑦73-74)

(3) 聖人の教説から見た宇宙的正義の実質

釈迦は、宇宙的正義を中道と呼び、中道(=正義)を仏の心であるとした。中道とは煩惱を解脱(自我を没却)して、慈悲の心になり人心救済を行う状態のことである。人間の究極の目的は、このような宇宙的正義の実現である。そのことによって、人間的・社会的正義も実現できる。

— 1. 聖人の中でも釈迦の教えが宇宙的正義の実質について明白に説いている。釈迦は中道すなわち正義を仏の心となした。中道とは貪・瞋・痴の三毒を解脱して、慈悲の心となり人心救済をなすに至った状態である。(⑦74)

— 2. 宇宙的正義とは、自己の保存・発達の精神から解脱して、自我を没却し、神の慈悲心を体得して、人心を開発救済する状態をさす。(⑦76)

— 3. 人間の究極の目的は、正義の実現にある。それは人間的・社会的正義の実現を指すが、人間的・社会的正義は基礎を宇宙的正義に置いているから、宇宙的正義の本質を会得し、自我没却し、慈悲の心となって、最高道徳的に行動することによって人間的・社会的正義も実現できる。(⑦76-77)

(4) 宇宙的正義と神の慈悲の性質

宇宙的正義は神の慈悲心と一致する。慈悲は最高道徳の実質の核心である。ここで、明確に宇宙的正義は神の慈悲心と一致することが述べられる。そして、慈悲の説明に入っていく。

— 1. 宇宙的正義は神の慈悲心と一致する。(⑦77)

— 2. 慈悲は最高道徳の実質の核心である。(⑦78)

(5) 正義と同情・親切・憐憫もしくは義侠心

西洋人は道徳的基準を正義に置き、東洋人は親切や義侠心に置くという見解が示されている。そして、正義を標準とする方がよいとしている。この部分には、西洋の近代の倫理学の正統派の理論が正義によって基礎づけられていることからの影響があるのではなかろうか。

— 1. 西洋人は、人間の善悪を考査する基準を正義に置くという。これに反して、東洋人は親切もしくは義侠心等を標準として人物を査定する。これは東洋人の欠点である。すべて人物の考査は正義を標準とすべきで、その上に親切な行いがあるということも考慮に入れるべきだ。(⑦100)

(6) 最高道徳は正義の実現を目的として自己の慈悲(犠牲)を方法とする

最高道徳は正義の実現を目的として、正義によらず慈悲(犠牲)によって実現しようとする。ただし相手によっては、正義によって対応する場合もある。

— 1. 普通道徳は正義の実現を目的とするが、正義を正義実現の唯一の方法とするから、他と衝突する。(⑦112-113)

一2. 最高道徳は正義の実現を目的とするが、その方法は正義の基礎に立つ慈悲によるから、他と衝突しないで、平和裏に目的が達成できる。(⑦113)

正義の基礎に立つ慈悲とは、相手が正義以上であれば純慈悲を用いるが、相手によって対応を変え、正義を標榜し、法律・腕力等に訴えることもある。(⑦114)

最高道徳は正義の実現を目的とするという点では、正義によって基礎づけられている倫理学の正統派の観点に立つものと言えよう。しかし、その正義実現の方法は慈悲によるという点は、ケアの倫理にも通ずる側面があるように思える。

しかし、ケアの倫理（ここではヴァージニア・ヘルド⁵⁾の説くケアの倫理）では、慈悲とケアは異なるものとしている。次に、ケアの倫理の特色を見ていこう。

2. ケアの倫理の特色

2-1. ケアと慈悲、ケアの倫理と徳の倫理

(1) ケアしている人と慈悲深い人の違い

マイケル・スロートは、ケアしている人を慈悲深い (benevolent) 人に近いと見ている。ただ、慈悲の場合、すべての人間の幸福の実現を目的とするのに対して、ケアリングは、「実質的にはすべての人への配慮」を含むことにまで広げることができるが、近くの親しい人への配慮を優先する、としている。

しかし、ヴァージニア・ヘルドによると、スロートは、ケアの倫理におけるケアリングの関係の中心的な役割を見落としている。

ケアする人は、効果的にケアしたいという意図とケアの性格をもつだけでなく、ケアリングの関係に実際に入るのである。もし人がそのようにする能力をもたないならば、その人はケアしようとしている人であり、まだ、ケアしている人ではない。ケアしている人であるためには、善い動機や気質・性格をもつ以上のことが必要なのである。ケアの実践に従事する能力とその能力を行使することが必要なのである。ケアは、感情や動機や意図だけでなく、「働き」なのである。……しかし、ケアは働きであるだけではない。働きが遂行されただけでは、不十分であるので、子供に食事を与える際にも、ケアするという適切な動機がなくてなされるのなら、不十分である。しかし、ケアするという動機をもつだけでは、ケアしている人としては不十分である⁶⁾。

5) 品川は、ケア対正義論争の帰趨を解説して、主として正義によるケアの統合を説くオーキンと、ケアと正義の編み合わせを主張するヘルドを対比して論じている。ケアの倫理と正義の倫理のあいだでは、その自己と他者の概念が共約不可能なまでに異なっているので、ケアを正義に完全に統合することはできないとする。その点からすると、両者の視点を異質ながら編み合わせようとするヘルドの試みは、ケア対正義論争のひとつの到達点を示していると指摘している。(品川、p. 240)

6) Virginia Held, *The Ethics of Care: Personal, Political, and Global*, Oxford University Press, 2006 (『ケアの倫理—個人的、政治的、グローバル』), p. 51

(2) 徳の倫理とケアの倫理の相違点

また、徳の倫理・理論に触れて、ヘルドは次のように述べている。

アリストテレスとヒュームを含み、徳の理論は、徳を個人に属するものと見ている。対照的に、ケアの倫理は、人と人の関係により関心を払う。ケアリングの「関係」は、人の人格・性格よりも重視される。もちろん、人と人の価値のある関係は、その関係の中にある人の人格に非常に影響されるが、すぐれた人格の人であっても、よい人間関係をもてないこともある⁷⁾。

このような理由で、ヘルドは、ケアは、徳の長いリストや短い要約のもう一つの構成要素とは見ない。ケアの倫理は、それ自体、もう一つの道徳についてのアプローチなのである。

ヘルドによると、関係についての判断は、個人についての判断とはしばしばかなり異なる。美德をもった二人の人であっても、敵対的な関係で、互いに助け合うことができないということもあり得る。ケアリングの関係は、「相互性」と、人間生活の中での相互依存の多様な状況においてこの相互性を実現する方法を育てることを必要とする。

独立した個人とその個々の状況のみを考えるのではなく、相互依存に注目することは、ケアの倫理の中心的特色である。ケアする人は、人間関係、政治、経済、グローバルな状況における相互依存性の中の相互性を育てていくのである。ケアする人はケアする関係を適切に評価し、既存の関係を修正し、よりケアする関係にしていく。そして、それを正しい方法で、正しい動機で行う。しかし、あくまで焦点は、自身の人格・性格ではなく、「関係」であり、ケアの「実践」である⁸⁾。

(3) 人格・気質としてケアを見ることの問題点

ヘルドは、人格・気質としてケアを見ることの問題点を論じている。

強い愛着や愛情を望まず、一人にしてほしいと望んでいる人に対して強い愛情をもち続けることは、ケアする関係を実現することに失敗しているという意味では、ケアの失敗である。もちろん、愛情を勝手に突然断ち切ることはできないが、距離を置いたり、贈り物することをやめたり、求められもしていない賞賛をやめるなどしていくことはできる。一方、一人にしてほしいと望んでいる人、例えば、かまひ過ぎの親から距離を置こうとしている若者などは、表面的には見下すような態度をするにしても、実際は継続的な愛情を歓迎するかもしれない。親と子は、ケアする関係は重要であり、確固たるものであり、より大きな相互的な自律のために再解釈される必要があることに気づくであろう⁹⁾。

(4) ケアにおける相互的自律

相互的自律に関連して、ケアする行為は慈悲とは異なることを次のようにも述べてい

7) Held, p. 52

8) Held, pp. 52-53

9) Held, pp. 54-55

る。

ケアの関係は、相互的自律を含むだろう。ケアリング（ケアする行為）を圧倒的な配慮をすることや、慈悲を持ちながら感情を抑制することなどと同じと見なそうとする傾向は、ケアについての歪められた広まった見方である。ケアを気質や性格と見なす見方は、その意図がケアされる人の望みや認識をどれだけ誤解していようが、そのような善き意図がケアの関係に貢献しないとしても、ケアしたいという善い動機をもっていさえすれば、ケアしていると誤って考えるようにしてしまう¹⁰⁾。

ケアを徳の一つとみなすことの問題は、ケアはどのようにあるべきかという問いに関連して明らかになる。ケアする人であろうとして自尊心をなくすほど自分をなくす人は、不可欠な徳をもたない人だと批判される。奴隷のような主婦、犠牲的な母親は、徳を熱望したが得られなかった人だというような批判である。我々は彼女たちの性格的な欠点を見つけるが、彼女たちが置かれている関係を調べれば、その関係の欠陥をよりはっきりとわかる。奴隷のような主婦は彼女を見下すマッチョな夫と厳格な父親に貢献しているのである。犠牲的な母親は、彼女の恩を省みないか、敬意を払うべきものを無視する子供を生み出すのである。賞賛すべきケアの実践を行う人は、自分自身を尊重するとともに、相互に尊重することを強め、相互に感受性を高めるのである¹¹⁾。

（5）慈悲や慈善とケアの違い

公共に関わる徳として、関係よりも動機に関することとして、ケアや慈悲をとらえると誤った方向に行きやすい。慈善はしばしば必要な人が望んでいることではなくなっている。慈善を施す立場にある慈悲の心のある人は、ただ慈善を施すのではなく、相互に配慮し合う共同体のメンバーがお互いのためにつくり出す適切な社会的プログラムと政策を通してその慈悲の精神を表明すべきである。すべての人に対する包括的な公的教育制度や医療や保健の制度の方が、金持ちが一部の必要な人に慈善のためにお金を出すことよりもはるかによい。

（6）ケアと権力関係、信頼と相互性

政治的、経済的領域では、慈悲や動機としてのケアによっては、ケアの価値をたやすく損なう権力関係を理解できない。公共との領域と私的領域に双方において、実際の権力の差違は避けられない。しかし、関係に焦点を当てる時、権力の差違が害を及ぼさないように、また、傷つきやすい人たちが力を高められるようにするためにいかにしてよい関係を築くかがわかるようになる。よいケアリングの関係は、道徳的な平等を相互に認めることだけでなく、巧妙であったり、露骨であったりする抑圧を避けるための実践を含んでいる。我々は慈悲深い支配の代わりに信頼と相互性を高めることができる。ケアする人はしばしば権力を行使する必要があるかもしれないが、暴力や害を与えないように権力を行使

10) Held, p. 55

11) Held, pp. 55-56

する最良の方法を理解している¹²⁾。

(7) ケアの倫理と共同体主義や徳の倫理との相違点

品川は、ケアの倫理と共同体主義や徳の倫理との相違点を次のように述べている。

ケアの倫理が主張するケア、関係の強調は、共同体主義や徳の倫理の基礎概念である友愛に重なる面がある。しかし、ケアの倫理を共同体主義や徳の倫理のなかに包摂しきることはできない。なぜなら、共同体主義が共同体内部の共有された価値観、徳の倫理が社会的役割と結びつきやすい美徳を強調するのに対して、ケアの倫理は特定の価値観や社会的役割と関わりなく、ただ、傷つきやすい、助けを必要とする人間観に立脚してケアの必要性を説いているからである¹³⁾。〔下線は竹内〕

2-2. 正義とケア

(1) 正義の倫理の諸価値とケアの倫理の諸価値

ケアにおいて正義への考慮が全く何の位置も占めないという考えの人は少ない。例えば、二人の子どものうち、一人だけをつねにかわいがることはいかににより大きなニーズがあるからといって正当化できない。

問題は、諸価値のどのような価値が優先するかであり、ケアの倫理と正義の倫理の実践において、どちらが優位を占めるかである¹⁴⁾。

正義の倫理の支配的な道徳理論では、平等、不偏、公平な分配、不干涉という価値が優先する。正義の実践においては、個人の権利が守られ、公平な判断がなされ、当然の罰が与えられ、平等な扱いが求められる。それと対照的に、ケアの倫理では、信頼、連帯、相互の気づかい、共感的応答といった価値が優先する。ケアの実践においては、関係が育まれ、ニーズに応えられ、感受性が重視される¹⁵⁾。

(2) 正義の倫理とケアの倫理の統合ではなく、編み合わせ

ヘルドはケアの倫理と正義の倫理は異なった面を重視しているので、統合ではなく、どのように編み合わせるかが課題であると主張する。

ケアの倫理が相互の関係性や特定の他者のニーズへの応答性をいかに重視しているか、また、正義の倫理が公平さと権利をいかに重視しているか、そしていかにこれらは異なった面を重視しているかを理解するために多くのことを述べるべきである。統合が行きすぎれば、この重要な違いが見えなくなる。私はむしろ次のように言いたい。適切な包括的な道徳理論は、ケアの倫理と正義の倫理の両方の洞察を含むものである。このどちらか一方が、他方を統合するのではない¹⁶⁾。

12) Held, p. 56

13) 品川, p. 24

14) Held, p. 15

15) Held, pp. 15-16

16) Held, p. 16

ケアと正義を、それぞれの異なった優先事項を見失うことなく、どのように編み合わせるができるかが課題である¹⁷⁾。

(3) 正義の倫理、ケアの倫理それぞれが優先する領域

それゆえ、正義の倫理、ケアの倫理それぞれが優先する領域があるとして、次のように言う。

私自身の提案は、これら概念を概念的に区別したままにして、それらが優先する領域を指摘することである。例えば、法律の領域では、ケアの考え方による人間的な配慮が欠けてはならないが、正義と権利の保証が優先する。家族の領域と友人間では、正義の基本的な要件は充足されなければならないが、包括的なケアが優先する¹⁸⁾。

(4) 市民社会はケアし合う関係を前提とする

正義の自由主義的な制度が機能するためには市民社会が存在しなければならないが、その市民社会の背景には、ケアし合う関係がなければならない、とヘルドは考えている。また、市場はどうあるべきかについても、ケアへの考察は実り多き基盤を提供するとしている。

一方で、市民社会が存在しないと正義の自由主義的な制度は機能しないが、市民社会の背景として、単なる競争する個々人ではなく、ある程度のケアし合う関係を前提とする（8章を参照）。さらに、どのように社会を組み立てるか、例えば、市場はどれだけの範囲にわたり、どれだけ制限するべきか、といったことについて、ケアへの考察は、正義への考察よりも実り多い基盤を提供してくれる（7章を参照）。そして、基本的必需品などへの権利といった、承認されるべき権利の保護に際して、共同体のすべての構成員をケアすることを表明する政策の方が、公平ではあっても、いやいやながら資格に欠けるとみなされていた人に割り当て分を分配する政策よりもよい政策である¹⁹⁾。

(5) ケアは最も根本的な価値

従って、ケアは最も根本的な価値であるとヘルドはいう。

ケアはおそらく最も根本的な価値である。正義なしでもケアは存在し得る。歴史的には、家族においては、少しの正義しかなかったが、ケアと生活は、それなしでもうまく進んでいった。しかし、ケアなしには正義はありえない。なぜなら、ケアなしには、子どもは生存できないし、人々も尊重されることはないからである²⁰⁾。

私は今や、ケアの関係は、その中に正義がはめ込まれる、より広い道徳的枠組みを形成すべきだと考えている。ケアは最も基本的な道徳的価値のように思える。実践面

17) Held, p. 17

18) Held, p. 17

19) Held, p. 17

20) Held, p. 17

では、生命はケアを必要とするので、ケアなしには他のいかなるものも持つことはできないことを我々は知っている。すべての人間はその幼少期に多くのケアを必要とするし、ほとんどの人が生涯を通じてケアの関係を必要とするし、欲している。一つの価値として、ケアは多くの実践が必然的に含むべきものを指し示している。例えば、子どもたちが必要な人間的ケアなしに、必要な物を与えられても、子どもたちは、全くとはいわないが、よく成長することはない。社会において、各人が、正義が要求する点においてのみ他の人を扱い、それ以上の配慮をしないならば、信頼と配慮の社会構造は不十分なものとなるか、なくなってしまうだろう²¹⁾。

人間は、関係の中にあり、相互依存的である。我々は自律を重んじすべきであるが、それは信頼の関係という枠組みの中で高められ、維持されなければならない²²⁾。

(6) 正義の領域を拡大しようとする従来の傾向の阻止

ヘルドによると、ケアの中で、正義が追求される倫理が提供される一方で、正義の問題に対処する場合は、ケアは適切な理論的方策を与えないであろうが、すべての道徳的問題に包括的な道徳を与えてくれるのは、正義なのではない。

ケアは、その中で正義が追求される広く深い倫理を提供する。例えば、ケアする関係にある人々が、競争する場合には、たがいを公平に扱う。また、社会のレベルでは、より薄いケアをする関係で、あたかも我々がリベラルな理論の抽象的な個人であるかのように、互いを特定の目的のために扱うことに同意することができる。しかし、ケアはより根本的な価値であるかもしれないが、ケアの倫理は、正義の問題に対処するにあたって、適切な理論的方策を与えるものではないだろう。適切な領域と関連する問題に対して、正義の倫理は我々の求めるものへの最善のものであるだろう。阻止すべきことは、すべての道徳的問題に妥当する包括的な道徳を我々に与えてくれると誤って想像させるような仕方で、正義の領域を拡大しようとする伝統的な傾向である²³⁾。

(7) ケアの価値の観点から、社会のすべての領域を変革する

ヘルドは、ケアの価値の観点から、社会のすべての領域を変革する必要があるとあり、ケアが社会の主要な関心事となるように、それらの領域間の関係も変革しなければならないと考えている。裁判で争うことが主要なことになったり、経済的利益の追求だけにとらわれた社会ではなく、ケアし合う関係が中心となる社会への変革が必要というのである。

ケアの価値の観点から、社会のすべての領域を変革する必要があるだけでなく、ケアが我々の注意の中心となり、社会の主要な関心事となるように、それらの領域間の関係も変革する必要がある。法律に規制される紛争によって支配され、経済的利益に

21) Held, p. 71

22) Held, p. 72

23) Held, p. 17

心を奪われた社会に替わって、個人的状況だけでなく市民の間でも政府機関の使用においても、最も重要な課題は子どもたちが元気であることとケアの関係の発展であるとする社会をもてるかもしれない。我々は、文化を商業界の指図にまかせるのではなく、人生を導き、豊かにするのに最良の仕方でも文化を発展させるべきである²⁴⁾。

(8) ケアする社会における最も重要な部分

ヘルドによると、ケアする社会では、企業、軍事力、政府と法律が社会における最も重要な部分ではなく、子どもの養育、社会の構成員の教育、すべての人のニーズの充足、平和の実現と環境保存が最も重要なのである。

企業、軍事力、政府と法律を、富と権力の最高レベルに値する社会の最も重要な部分と見る替わりに、ケアする社会では、子どもの養育、社会の構成員の教育、すべての人のニーズの充足、平和の実現と環境保存といった仕事、そしてこれらのことを最善の方法で行うことを、最も大きな社会的努力が傾けられるべきものだと見るだろう。グローバルなレベルも含めて、法律的規制と警察による強制に匹敵するものが、特別な場合にはつねに必要なことを我々は理解するが、同時に、ケアする社会は、それらの必要を大きく減らすだろうことも理解している²⁵⁾。

発展してきたケアの倫理は、確かに家族と個人的関係の領域に限定されるものではない。その社会的、政治的意味を理解すると、それは社会の大きな再編成を求める急進的な倫理であることがわかる。そして、それは権力と暴力にも対処する力も持っている（特に8章と9章を参照）²⁶⁾。

(9) 市場や法律・統治の政策を、ケアする関係が支え、とりまいている必要がある

ヘルドは、自律した合理的な自由な個人を前提とする市場や法律や政治の構築物を、ケアする関係が下から支えたり、周囲からとりまいている必要があるという。

限定された目的のためには、我々は互いを市場における自由な個人として独立、自律、合理的とみなしてもよいし、法律と統治の自由主義的計画や個人の利益を最大化する政策を採用してもよい。しかし、人間の相互依存といういっそう深い真相と、ケアする関係がそのような構築物を下から支え、とりまいている必要のあることを見失ってはならない²⁷⁾。

(10) 絵やタペストリーやガラスの彫刻のメタファーでケアの倫理を捉える

ヘルドは、ケアの倫理は、ケアする関係がデザイン全体であり、その中に正義と功利の価値、美徳の価値などの構成要素が含まれている絵やタペストリーというメタファーによって理解すべきだという。

24) Held, p. 18

25) Held, p. 19

26) Held, p. 19

27) Held, p. 43

ケアの倫理の場合には、論理的关系や概念的 analysis による還元 of the metaphor に替わって、おそらく我々は絵やタペストリーやガラスの彫刻を考えるべきであろう。目立つ要素とあまり目立たない要素が含まれているひとつのデザイン全体がある。ケアする関係という道徳理論はデザイン全体であり、その中に正義と功利の価値の周りに編成された、いくつもの顕著な構成要素がある。そして、美德に関連する多くの興味深い詳細な要素がある。その全体は調和的でなければならないが、それはその構成要素がいちじるしく異なってはならないということを意味しない²⁸⁾。

3. まとめ

3-1. 関係性を重視するケアの倫理と慈悲深い人格や徳としての慈悲

ケアの倫理では、モラロジーの品性完成の考え方に見られるような、個人が慈悲深い人格を目指すといったことよりも、ケアの関係性を重視する。人を思いやる慈悲深い心を持ち、ケアしようという気持ちがあり、また、慈悲深い人格を有している人であっても、ケアを行っていないならば、ケアする人とはいえない、というヘルドの主張にもこのことが示されている。

また、ヘルドは、人格がすぐれていても、よいケアの関係をもてるとは限らない、という観点も強調している。ケアの関係は、人と人との相互的关系であり、ケアがよく行われているか否か、ケアの関係が実現できているかが問題であり、個人の人格がすぐれているかどうかという問題ではないのである。

慈悲が美德の一つであると思えることができるとしても、ケアは美德の一つとはみなせないというのである。

モラロジーの「品性」をどのように捉えるかが問題である。ケアリングの関係を築けるような人格を指すのであれば、慈悲深い人格とケアの関係をもつことは一致するであろう。

早くからケアの倫理に注目し、研究してきた水野治太郎（麗澤大学名誉教授）は、伝統的倫理学の、品性や人格や徳とは、「人間の内側から引き出された他者への感性を中心とした総合の技を概念化したのではないか」とし、その総合の技は、「治療者 [ケアする人] と患者 [ケアされる人] との間に交流する繊細な感性で、まったく主観的で独自のものであって、それでいて、経験と訓練を経てゆく中でだれもが会得できるものではないか」と述べている²⁹⁾。さらに、品性の完成を「人間性の完成」と捉え、それは「万人が同じところまで到達するという意味ではなくて、個々人独自の個性と人格の諸側面がバランスよく統合されて、その人なりの「成熟性」を招来させるという意味で、個人個人独自の完成度を表す」と述べている³⁰⁾。また、「ケアの理論と広池の教育論が互いに長所を生かして、

28) Held, p. 74

29) 水野治太郎『ケアの人間学』ゆみる出版、1991年、p. 103

30) 水野治太郎『成熟の思想』広池学園出版、1993年、p. 229

相互に対話ができ、互いにケアし合えば、両者の理論が統合化された形になるのでは」と示唆している³¹⁾。

3-2. ケアの倫理と伝統の原理

ケアの倫理には伝統の原理の考え方に近いものはあまり見られない。ケアの倫理は、ケアに基づいた社会を目指す、傷つきやすい、助けを必要とする人間に対するケアに焦点を当てるのである。

水野治太郎は、「世代間のケア」という観点から、伝統の原理を展開している。E・H・エリクソンの世代間のケアに言及して、さらに、ケアの問題の視野を広げ、「人間を社会的視野からだけではなしに、生命活動あるいはすべての生命・非生命を包み込む宇宙の営みとして把握する」ことを提案している。そして、人類の活動は、「宇宙があらゆる生物をはぐくんでゆくように、育成すること、すなわちケアそのものであると理解してよいと思う」と述べている³²⁾。また、「人間いかに生きるかを論じるとき、他者とのつながりを尊重する生き方とか世代間の積極的つながりをすすめ、「つなぎ」をつくり出すことに人間性の開花のプロセスを見いだすこともできるのである」と述べている³³⁾。

3-3. モラロジーにおける正義と現代の倫理学・道徳論における正義

最高道徳は正義の実現を目的とするが、その方法は慈悲によるし、目的である正義も、慈悲を含む宇宙的正義である。宇宙的正義は神の心、自然法ともみなされている。現代の倫理学や道徳論における正義の倫理とケアの倫理の対決や、ケアの倫理における正義の位置づけの議論で論じられる「正義」は、神の心や自然法に当たるような宇宙的正義ではなく、人間的・社会的正義のことである。「権利、平等、公平、普遍化可能性、公正、中立性、抽象性、推論、手続き的等々」を鍵となる概念として論じられるものである。しかし、それは、廣池が述べているように、人ごとに国ごとに異なる正義ではなく、普遍妥当的なルールとみなしている。

3-4. 自然の理法と道徳原理——人間学の位置づけ

すでに見たように、自然法、自然の法則という概念が『道徳科学の論文』では展開されている。そして、その自然の法則は、慈悲に一致するとされる。宇宙は万物を生み育てる働きがあり、それを神の慈悲の心と見ている。自然の理法と道徳原理の関係について、水野治太郎は次のように論じている。

廣池の方法論においては人間は自然の理法によって支配され、生かされて生きている受動的な存在として認識されている。しかも、だからこそ人間は、自然の理法を尊重し服従すべきであるとの結論を容易に導くのであるが、そこに方法論的な弱点を抱え

31) 水野『ケアの人間学』、p. 64

32) 水野『ケアの人間学』、p. 31

33) 水野『心を癒す物語』廣池学園出版部、1997年、p. 244

ていることはいまさら指摘する必要がないぐらい明白なことである。そこで人間主体が、みずからの自覚として自然の価値を認め、そこに理法を認め尊重するという人間学的手法が必要である³⁴⁾。

「人間の運命を支配するような自然の理法が存在するかどうか」という問いに対して、「近代の自然科学主義はその理法を、人間の目で確認できるような事実の実証を唱える立場に立つ。」「もし人間が〔自然の理法〕全体を目で見ようとするならば、それは心の目とつか意味の世界とつか、象徴的な世界においてはじめていえることではないかと思う。人間が人間を越える大きな働きによって支えられているという感覚は人類の英知でもある。』³⁵⁾

そして、人間学は、人間自身が「自然の理法の意味をくみとり大胆に解釈し、展開してゆく姿勢を貫くものである。」とし、次のように結んでいる。

人間も文明社会も本来の在り場所である自然との調和を保ちながら柔軟に生きることが求められる。それができるのは、もはや過去の物質を対象にしてねりあげられた自然科学主義ではなく、人間学に依拠するものでなくてはならない³⁶⁾。

水野は、モラロジーは、科学の知、成熟の知、神話の知の総合の知であるとしている³⁷⁾。

(キーワード：ケアの倫理、正義、慈悲、モラロジー、最高道徳、廣池千九郎)

34) 水野「人間的道徳学の試み」『道徳科学年報』2号、麗澤大学道徳科学担当者、1992年所収、p. 67

35) 同上、p. 68

36) 同上

37) 水野『成熟の思想』参照。